



トイレの建設作業に住民たちも協力してくれました。



ピースウィンズ・ジャパン現地レポート

隣国ケニアから南スーダン事業を動かす

アシスト南スーダン!

今、世界でもっとも多くの国内避難民・難民を抱える南スーダン。その現状が日本に伝えられる機会は少なく、知るすべも限られている。未知の国・南スーダンで何が起り、今どうなっているのか? タウトク編集部では、NGOピースウィンズ・ジャパンの協力により、その現実の姿を伝えていきます。支援活動続ける同スタッフの奮闘のレポートを紹介しつつ、南スーダンが抱える問題を少しずつひもとき、少しでも身近な出来事だと感じられるようにしたい。

株式会社メディコムでは、読者の皆さんにタウトクを1冊(350円)購入いただくにあたり、その約1%である3円を、南スーダンをはじめアフリカの復興支援のために送金します。

「支援している」という高みに立った目線ではなく、積極的に関わり合いをもつことで現地の様子が気になるようになり、やがて世界で起こっているいろんな紛争や悲劇と、自分たちは決して無縁ではないことを肌で感じるための「3円」だと思っています。ぜひこの1%運動をご理解いただき、本誌連載にご注目ください。

PWJの携帯サイトはこちら!



世界各地で支援活動続けるスタッフからの「現地活動レポート」、最新のNEWSなどの情報が携帯からチェックできるようにしました! 左のQRコードからアクセスしてみてください! <http://www.peace-winds.org/m/>

タウトクでは毎月、南スーダンの国内避難民・難民支援事業へ送金した金額=タウトクの販売部数×3円を読者のみなさんにお知らせします。

タウトク7月号の販売部数
7,116部×3円=21,348円

を支援金としてPWJを通じ南スーダンの国内避難民・難民支援事業に送りました。



peace winds JAPAN
月刊タウン情報トクシマ
タウトク
medicomm inc
株式会社メディコム
月刊タウン情報トクシマ編集部

日本は残暑の頃でしょうか? ケニアの首都ナイロビは一年を通して気温が20度台と快適で、陽に当たらなければ汗ばむ事ありません。日本と季節が逆で、6月から7月にかけて朝晩が冷え込み、大袈裟な人はダウンコートを着ています。ほとんどの家にエアコンは無く、空調が必要なのは大きな商業施設だけです。皆さんのアフリカのイメージは暗黒大陸・未開といった印象が強いかもしれませんが、ナイロビには緑多き住宅街、多様なレストラン、綺麗なショッピングモール、最新の3D映画を鑑賞できる映画館などもあります。

私は、南スーダン事業を担当していますが、現在隣国ケニアのナイロビに駐在しています。その理由は、南スーダンでは未だに地方で内戦が続いており、治安が不安定だからです。戦禍に赴き被災者を救うのがNGO等の活動なのでは?とお思いかもしれませんが、安全に事業を実施することも大切です。日本国政府も邦人の安全のために、南スーダンに限らず、国連やNGOの支援地であっても治安の悪い地域には邦人の渡航を厳しく制限しています。例えばケニア国内でも首都ナイロビのスラムや、北東州にあるソマリア難民キャンプが立ち入り禁止です。南スーダンは一般市民にも武器が回り、武装強盗が絶えません。街ではNGOの事務所や宿舎、地方ではたくさんの牛を飼う放牧民のキャンプが武装強盗の標的になっています。

このように日本のNGO職員が容易に現場に行けない地域が増えている昨今の世界の治安情勢から、支援現場に入れない場合の活動実施と事業管理のノウハウを蓄積する時が来ているのだとも思います。しかし、遠隔地から現地に何から何まで指示を出して事業を進めるのも困難です。PWJの場合、現地職員の多くが

2013年12月の戦闘時に散り散りばらばらになってしまい、反政府地域に逃げたスタッフ達とは一年半経つ現在も連絡が取れません。地方にあった事務所を閉めた後、南スーダンでの事業を継続するために、日本人の入域が限定的に許可された首都ジュバにおいて、南スーダン人が運営する地元のNGOとパートナーシップを組み、国内避難民キャンプでの衛生支援プログラムを開始しました。現地のNGOと協働することで、遠隔での事業運営を補完しあっています。パートナーシップ2年目である現在、活動地は避難民キャンプの中だけでなく、その近隣にも拡大し、キャンプ内活動で培ったノウハウを活かすべく、現地政府機関やコミュニティ、学校、教会を巻き込んだ活動を進めています。

先日、日本大使が視察のため事業地を訪ねられた時、パートナーシップ開始時に20人規模であったローカルNGOが、今では国内4州で200人以上のスタッフを抱え、国連機関や他国ドナーからも資金調達し複数事業をまわせるまでに実力を付けた事を特に喜んで下さいました。(大使の本件に関する南スーダン通信はこちら:http://www.ss.emb-japan.go.jp/itpr_ja/tsushin_20150715.html)

現在、衛生教育を実施している地域で、昨年はコレラが流行しましたが、今年はまだ発生していません。家にトイレが無い、石鹸が無い、綺麗な水が無い、といった状況のホストコミュニティにも、自主的にトイレを作ろう、井戸水を使おう、家の周りを掃除しよう、とアクションを起こし始めた住民達があります。遠隔での事業運営は課題も多くありますが、地元の人々の自主性と意欲を原動力にし、これからも成果を出していきたいと思えます。

報告:清水貴子(南スーダン事業担当)



事業地・ジュバとナイロ川。



トイレ掃除も衛生のためには重要です。



事業開始前に生活用水として使われていた水。衛生教育活動の後には井戸水が求められるように。